

1. はじめに

昨年度に引き続き、令和2年4月3日から土橋遺跡の発掘調査が始まりました。今年度はC・D区の調査になります(第1図)。D区上面(平安時代:約1,000年前)の調査は4月28日に終了しました。現在はC・D区下面(縄文時代後期:約4,000～3,500年前)の調査を行っています(第2図)。



第1図 調査区の名称



第2図 発掘調査のようす

2. ハート形土偶が出土しました!

C区ではハート形土偶が2点出土しました(第3図)。顔のかたちが「ハート形」であることが名前の由来です。縄文時代後期のはじめ(約4,000年前)に、東北～関東を中心にさかんに作られました。

右の土偶はきれいなハート形です。重要文化財である群馬県郷原遺跡出土のハート形土偶によく似ています。大きさは約9cmで、県内でも最大級の大きさです。左の土偶は4.5cmの小型のもので、頭の後ろには髪を編んだような表現が見られます。

土偶は様々なマツリに用いられたと考えられています。ちょうど土橋遺跡があった頃は、気候変動による寒冷化で食べ物が減り、インフルエンザなどの感染症も流行したため、人口が激減したのではないかと考えられています。縄文人も、現代に生きる私たちと同じように、ハート形土偶に平穏無事の祈りを捧げていたのかもしれません。



第3図 出土したハート形土偶

3. 発掘調査の状況

昨年度調査した B 区下面では、縄文時代の建物の柱穴（はしらあな）やお墓・マツリ場の場と考えられる遺構がそれぞれまとまって見つかりました。現在調査を行っている C 区では、これまでとは少し様子が違う遺構が見つかりました。

第4図に示したように、縦横 5mほどの範囲では、20～30cmほどの大型礫（大きな石）がたくさん出土しています。また、石はまとまって配置されたような状況も見られます。さらに、この大型礫付近には、3か所で地面が焼けた跡である焼土（しょうど）が見つかりました（黄色で囲った部分）。焼土の範囲はオレンジ色から赤色に変色しており、長時間にわたって火を焚いていたと思われます（①の焼土）。焼土の中には、白く焼けた細かな骨片もたくさん含まれています。

今後は、(1) 焼土の性格（何を焼いたのか、屋内の囲炉裏か・屋外での焚火か）、(2) 大型礫と焼土はどのような関係があるのか、など検討しながら調査を進めたいと考えています。



第4図 大型礫と焼土の検出状況（C区）



① 焼土



① 焼土と骨片